世界名作劇場

小公女セーラ（プリンセス）

『エミリーの運命』

第 24 話

制作　日本アニメーション
　　　フ　ジ　テ　レ　ビ

脚本中西隆三

登場キャラクター（第二十四話「エミリーの運命」）

セーラ・クルー

ミンチン院長

アメリア先生

ベッキー

ピーター

ロッティ

アーメンガード

ラビニア

ジェシー

ガートルード

モーリー
ジェームス
デュファルジュ先生
花屋のおばさん
エミリー（人形）
シーザー（猫）
メル（子ネズミ）

1 ミンチン女学院・表

教室の窓から、デュファルジュと女生徒たちのフランス語の声が聞こえている。

デュファルジュの声「Nettoyej（ネトワイエ） mes（メ） souliers（スーリエ）……」

女生徒たちの声「Nettoyej mes souliers……」

デュファルジュの声「Repassej（ルパセ） ces（セ） effets（ゼフエ） sil（シル） vous（ヴ） plait（プレ）.」

女生徒たちの声「Repassej ces effets , sil vous plait.」

2 同・地下の作業場

女生徒たちの洗濯物に、アイロンをかけているセーラー

――

その傍で、ベッキーが、女生徒たちの外出靴を磨いている。

そこへ入って来るモリー――

モリー「ちょっと、お前たち。なにをグズグズしてるんだよ。今日は授業が終ったら、ラビニアさんの誕生パーティなんだよ。さあさあ、早く支度を手伝うんだよ」

セーラ「は、はい、モリーさん……」

3 同・廊下

アメリアが、振鈴を鳴らす――

× × ×

院長室のドアが開き、ミンチンが出て来る――

4 同・教室

聞えている振鈴の音――

デュファルジュが教科書を閉じると、

デュファルジュ「では、今日は、ここまで……オ・ル・ボワ・マドモアゼル……」

女生徒たち「オ・ル・ボワ　ムシュウ、デュファルジュ……」

一斉に立上る女生徒たち

その時、ドアが開いて、ミンチンが入って来る。

ミンチン「さあ、皆さん、会場の準備を急いで下さい」

女生徒たち「はあい……」

ミンチン「（微笑）デュファルジュ先生、今日は、この学院の代表生徒ラビニアさんの誕生パーティを開く事になっていますのよ」

デュファルジュ「ほほう……」

と、ラビニアを見る。

ラビニア、ニコやかに膝をちじめる。

ラビニア「デュファルジュ先生、よろしければ、是非御出席を……」

デュファルジュ「メルシィ……では、お呼ばれする事にしようかな、マドモワゼル・ラビニア……」

わっと歓声をあげる女生徒たち――

ミンチン「さ、ラビニアさん、早く着がえをしていらっしゃい」

ラビニア「はい、院長先生……」

5

同・一階廊下

教室から歓声と共に出て来るジェシー、ガートルード以下の女生徒たち、遊戯室の方へ――

× × ×

一方に、地階から上って来たセーラ。洗濯物と磨いた靴を手に、立尽して見送っている。

× × ×

遅れて教室から出て来るラビニア、ふっとセーラに気づ

いて立停る。微笑すると、真っ直ぐにセーラの前に来る。

ラビニア「それ、私のね」

セーラ「え、ええ」

ラビニア「私の部屋へ届ける所だったんでしょ」

セーラ「ええ……」

ラビニア「丁度いいわ、持って来て」

ラビニア、云うなり先に立つ。

セーラ、見送ったが、止むなく続く。

6 同・三階の廊下

階段を上って来るラビニア、ドア前へ行くと振返って、

続くセーラを待つ。

ラビニア「入ってよ」

ラビニア、ドアを開けると中へ――

セーラ、仕方なく続く。

7

同・ラビニアの部屋

そっと入るセーラ——

ラビニア、勝ち誇った微笑で迎える。

ラビニア「あなた、今日がどんな日だか知っているでしょ」

セーラ「お誕生日ね……あなたの……」

ラビニア「（頷く）じゃ……これから何がはじまるかも聞いている筈ね」

セーラ「（頷く）ええ……」

ラビニア「なら話が早いわ……パーティの着がえ手伝って頂戴」

凝然と見るセーラ——

ラビニア「どうしたの？……あなたは、この学院の生徒のために働くメイドになったんでしょ？」

セーラ、じっと見返す――

ラビニア「だったら、私の為に働く義務がある筈だわ」

セーラ「あなたは……どうしても、私を……自分の事の為に働かせたいのね」

ラビニア「そうよ。いけなくて?」

セーラ「それ程私を憎んでいるの?……そんなに私をいじめたいの?」

ラビニア「あなたを憎んでるですって?」

ラビニア、故意に笑ってみせる。

ラビニア「やめてよ……そりゃ、あなたがプリンセスみたいに扱われてた頃は、少しは憎らしいと思った事もあったかも知れないわ……でも、今は、あなたは台所のメイド……そして私は、この通り特別室にいる代表生徒よ。なぜ、あなたを憎む必要があるの?」

セーラ、無言で見返す。

ラビニア「あなたは、私のために働く立場になっただけよ。さ、こっ

ちへ来て！」

奥へ促す――　セーラ、仕方なくラビニアに続く。

8

同・遊戯室

誕生パーティの準備をしている女生徒たち――

その中で、ジェシーに追いまくられてウロウロしている

アーメンガード――

ジェシー「アーメンガード！　早くそっち終らせてよ。間に合わない

じゃないの」

アーメンガード「そ、そんなこと云ったって私だって急いでるのよ」

ジェシー「グズ！　早くしなさいってば！」

×　　×　　×

一方で、ガートルードに使われているロッティ――

ガートルード「ロッティ！　しっかり持っててよ！」

ロッティ「だってェ、手がくたびれたんだもん……（泣顔）」
ガートルード「また泣く！……この泣き虫！」
わっと泣き出す――

9 ラビニアの寝室

鏡の前で、椅子に掛けたドレスのラビニアが、後ろに立つセーラに髪かざりをつけさせている――
ラビニア「違うわ、もっと左よ！」
セーラ、髪かざりを動かす
ラビニア「もっとよ……そう、それでいいわ」
ラビニア、椅子を立つと、鏡に全身を写してみる。
ラビニア「どお……私、きれいに見えて？」
セーラ「ええ……とてもきれいよ」
ラビニア「あなたの誕生日の時と、どっち？」

セーラ「え……？」
ラビニア「どっちがきれいなの？」
セーラ「そんな事……私には判らないわ」
ラビニア「私、あなたの口から聞きたいのよ……さ、云うのよ」
セーラ、微かに吐息し、口を切る。
セーラ「私……自分を、ほかの人よりきれいだと思った事はないわ」
ラビニアの顔に、満足そうな微笑が浮び、頷く――
ラビニア「それで決ったわね……じゃ、私の為に、手を借して！」
ラビニア、左手を出す――
セーラ「え……？」
ラビニア「あなた、この間、屋根裏部屋でアーメンガードたちと、こっそりパーティをやろうとして、ミンチンさんに捕ったでしょ？」

10

フラッシュ（第二十二話より）

屋根裏で、テーブルを飾るセーラ、アーメンガード、ロッティ、ベッキー――

ラビニアの声「あなたたち、王宮の侍女になったつもりだったんですってね」

11 同・ラビニアの寝室

ラビニア「あの時の続きをさせてあげるわ」

怪訝に見るセーラ――

ラビニア、出した左手で促す。

ラビニア「あなたを、私の侍女にしてあげるのよ……さ、手を借して！」

セーラ、じっとラビニアを見返す――

12 同・三階の廊下

のっそり上って来たシーザーが、うさん臭そうに唸り声
をあげる——

×　×　×

ドアが開き、セーラに左手をとらせたラビニアが、右手
でドレスの裾をつまみ、気取った様子で現われ出る。

×　×　×

不快気に啼くシーザー——

×　×　×

ラビニア、セーラを侍女役にしたつもりで、優雅に階段
を降りて行く——

×　×　×

見送ったシーザー、たて続けに抗議のクシャミ——

13

同・遊戯室

合図してオルガンを弾き出すアメリア、一斉に誕生日の唄を唄い出すジェシー、ガートルード、アーメンガード、ロッティ以下の女生徒たち

女生徒たち「ハッピー・バースディ、ラビニア……」

ドアが開き、セーラに左手をゆだねたラビニアが、気取った優雅さで入って来る。

× × ×

待ち構えて、微笑で拍手するミンチン。

その脇で、遅れて拍手しはじめるデュファルジュ——

だが、その眼は、セーラの姿に惹きつけられている。

× × ×

ラビニアが、セーラを離れて、中央テーブルに進み、囲んでいた女生徒たちの唄が終る——

ミンチン「では、皆さん……わが学院の代表生徒、ラビニアさんのお誕生日をお祝いして、心から喜びの言葉をお送り致しまし

ょう」

女生徒たち、一斉に喜びの言葉を唱える。

女生徒たち「お誕生日、おめでとう……」

ラビニア「有難う、皆さん……」

女生徒とミンチンたち、一斉に拍手する。

ラビニア「院長先生……」

ミンチン「（微笑）なんですの、ラビニアさん」

ラビニア「お願いがあるんです……このパーティに、セーラをいさせてあげてはいけないでしょうか」

ミンチン「セーラを？」

驚くセーラ——　ざわめく女生徒たち。

ラビニア「セーラは、ついこの間まで、私たちのクラスメートでした。きっとこのパーティにも出たかったに違いありません……私、可哀想なセーラを昔通り仲間に入れてあげたいんです」

ミンチン「まあ、なんと云う思いやりの深さでしょう……セーラ、ラ

ビニアさんの親切に感謝しなければいけませんよ」

セーラ「は、はい……」

ラビニア、満足気にセーラを見返す。

一方で顔を見合せるアーメンガードとロッティ――

ミンチン「では、ここで、ラビニアさんに誕生日のプレゼントをお渡しする事にしましょう……皆さん、それぞれ用意してありますね」

女生徒たち「はあい……」

ミンチン「よろしい……では、まず私から……ラビニアさん、誕生日、おめでとう」

ラビニアにリボンの包みを渡す。

ラビニア「有難うございます、院長先生……」

一斉に拍手――代ってアメリアが出る。

アメリア「お誕生日おめでとう、これ、私が作ったフランスししゅうよ」

リボンの包みを渡す

ラビニア「有難うございます、アメリア先生」

一斉に拍手

一方で、じっと見守っているセーラ。

ふっとラビニアが、セーラの方に視線を向けると、誇らし気な微笑を見せる。

ジェシーが進み出てプレゼントする。

ジェシー「おめでとう、ラビニア」

ラビニア「有難う、ジェシー」

一斉に拍手

ガートルードが進み出て、プレゼント。

ガートルード「おめでとう、ラビニア」

ラビニア「有難う、ガートルード」

一斉に拍手――

リボンの包みを手にしたアーメンガードがジェシーに小

突かれる。

ジェシー「（小声）あんたの番でしょ」

アーメンガード「え、ええ……」

一瞬、セーラの方を見て気にしたが、おずおずとラビニ

アの前に来てプレゼント。

アーメンガード「お、おめでとう、ラビニア」

セーラ、じっと見守っている――

（中　C　M）

14

同・表

荷馬車が停っており、配達人が大きな木箱をジェームスに渡している。

――女生徒たちの拍手がかぶる。

15

同・遊戯室

最後のロッティが進み出て、小さなリボン包みを渡す。

ロッティ「お、おめでと、ラビニア」

ラビニア「(微笑) 有難う、ロッティ」

一斉に拍手――

ロッティ、パッとセーラの傍に駆け寄る。

ロッティ「(小声) セーラ・ママ……ごめんなさい……私、ほんとは、ラビニアなんかに……」

セーラ「ロッティ……（首を振ってみせる）」

テーブルに山と積まれたプレゼント——その脇で一同を見渡すミンチン。

ミンチン「さてと……これで皆さん、全部終りですね」

脇に並んだラビニアが、振り仰ぐ。

ラビニア「院長先生……」

ミンチン「なんです？ ラビニアさん」

ラビニア「まだ、セーラが残っていますわ」

ミンチン「セーラですって？」

はっと見るセーラ——

ラビニア「ええ、セーラも、私のお誕生日祝いをさせて欲しいって、そう云ってくれていたんです」

ミンチン「まあ……」

ラビニア、驚いて立尽すセーラの前に、微笑で近づく。

ラビニア「有難う、セーラ……でも、プレゼントの事で無理しなくて

もいいのよ」

セーラ「え……」

ラビニア「私、あなたのいらなくなったものでも、有難くお受取りするつもりよ……例えば、あの古いお人形でも……」

セーラ「エ、エミリーの事を云ってるのね」

ラビニア、微笑で頷いてみせる――

茫然となるセーラ――

その時、ドアが開いて、モリーが入って来る。

モリー「院長先生、ラビニアさんに荷物が届きましたが」

ミンチン「まあ、ラビニアさんに……」

ラビニアも振向く――

ドアから、先刻の木箱の包みを運び込んで来るジェームス――

ミンチン、ラビニアたち、取囲む。

ミンチン、荷札を読んで、

ミンチン「まあ、アメリカのお父様からよ」

アメリア「きっと、お誕生日のプレゼントですわ」

ラビニア「院長先生、ここで開けてみてもいいでしょうか」

ミンチン「ええ、ええ、いいですとも……ジェームス、包みを解いておあげ」

ジェームス「へい、かしこまりました」

ジェームス、木箱のこん包を解きはじめる――やがて現われる当時最新の自転車。

取囲んだ女生徒たちに、どっと歓声がまき起る

ラビニア「院長先生！……これで、皆と前の広場で遊んでもいいでしょうか」

ミンチン「ええ、ええ、よろしいですとも。今日はあなたのお誕生日なのですからね」

わっと歓声をあげる女生徒たち、ラビニアと共に自転車を運んで流れ出て行く。

アメリア「お姉様、私も、一寸様子を見て参りますわ」
ミンチン「アメリア……！」
　アメリア、急いでラビニアたちを追って行く。続くミンチン――
　取り残されたセーラの傍に、ロッティとアーメンガードが心配気に近寄る。
ロッティ「セ、セーラ・ママ……エミリーをあげちゃうの？」
アーメンガード「そんな……いけないわ、セーラ……」
セーラ「アーメンガード、ロッティ……あなたたちも、遊びに行ってらっしゃい」
アーメンガード「でも……」
セーラ「行かないと、仲間外れにされるわ」
　ロッティとアーメンガード、顔を見合せたが、仕方なく出て行く。
　ふっと息をつくセーラ――じっと考えたが、決意した

ように続く。

×　　　×　　　×

離れた椅子に坐って――デュファルジュがじっと見送っている。

16

同・三階の廊下

独り昇って来るセーラ――

17

同・屋根裏部屋

入って来るセーラ――見る。

――置かれた儘のエミリー。

セーラ、近づくと、そっと抱き上げる。

セーラ「エミリー……ラビニアが……ラビニアが、あなたを……」

セーラ、悲しみに、声がつまる。

18 フラッシュA

路上で——振向いて父に叫ぶセーラ（第二話より）

セーラ「お父様！……エミリーよ！　エミリーがいたわ！」

19 同・屋根裏部屋

エミリーをじっと抱きしめているセーラ。

セーラ「あなたは……あなたは、お父様の最後の想い出だったのに……

…」

20 フラッシュB

特別室の床で——エミリーを抱いて、父との別れに耐えるセーラ（第二話より）——汽笛。

セーラ「お父様……！」

21 同・屋根裏部屋

エミリーを抱きしめるセーラ、その眼に涙が光る——

セーラ「そして、お父様が亡くなった時も……私、あなたを手放そうとはしなかったのに……」

22 フラッシュC

院長室で——黒リボンのエミリーを抱いてミンチンに懇願するセーラ（第十三話より）

セーラ「お願いです。エミリーを取り上げないで下さい。一緒に連れ

て行かせて下さい……」

23

同・屋根裏部屋

セーラの眼から、涙が溢れる――

セーラ「許して、エミリー……」

堅くエミリーを抱きしめる――

その時、突然、ドアが開いて、ベッキーが飛び込んで来る――

ベッキー「お、お嬢様……！」

はっと見るセーラ――

セーラ「ベッキー……」

ベッキー、荒い息で近づく。

ベッキー「そ、そんな……い、いけませんです……エミリーちゃんをあげるなんて……」

セーラ「え……」

ベッキー「いま、アーメンガードさんとロッティさんに聞いたんです……ラビニアさんは、お嬢さんを困らせようと、いじわるしてるだけなんです！」

セーラ「ええ……それは判っているわ……でも……」

ベッキー「いいえ、あんな方の云いなりにおなりになる事なんてないんです……そんな事なすったら、エミリーちゃんが、どんなに悲しむか知れませんです！」

セーラ「ベッキー……私だって……私だってエミリーを手放したくなんてないわ……でも、他にどう出来ると云うの……」

ベッキー「そ、それは……」

セーラ、改めてエミリーをみつめる。

セーラ「判って、エミリー……あなたと、もうお別れするしか、仕方がないのよ……」

セーラ、エミリーを抱くと、ドアへ向う。

ベッキー「お、お嬢様……！」

24 同・屋根裏部屋の前

ドアが開き、エミリーを抱いたセーラが出て来る

思いつめた足取りで、階段口へ。

続いて心配そうに追って出るベッキー。

25 同・三階の廊下

屋根裏部屋へのドアが開き、エミリーを抱いたセーラが出て来る。

× × ×

寝ていたシーザーが、のっそりと起上ると、ひと鳴きして先に立つ。

×　　　×　　　×

重い足で続くセーラ――階段口へ

×　　　×　　　×

ベッキー、茫然とあとを追って来る。

ベッキー「お、お嬢様……」

26　同・二階の階段

シーザーに続き、降りて来るエミリーを抱いたセーラー
――ふっと、その足が停り、眼が表窓へ行く。

×　　　×　　　×

拡大する表窓に――離れた広場で自転車で騒ぐラビニ
ア達の姿。

27　同・広場

鮮かに自転車を乗りこなすラビニアと、追うジェシー、ガートルード

見守る女生徒たちと――　ロッティ、アーメンガードの姿。

28　同・二階の表窓

じっと広場をみつめていたセーラ。

その背後に、ベッキーが近づく。

ベッキー「お、お嬢様……」

セーラ、振返る

ベッキー「い、いけませんです、お嬢様……」

セーラ、悲しく首を横に振ると、階段口へ向う

ベッキー「お、お嬢様……！」

そのベッキーの眼に、涙が光る――

29 同・一階階段

シーザーに続いて、降りて来るセーラ、地下への階段へ――

×　　×　　×

廊下の一方で、怪訝に見送って立つデュファルジュ――

×　　×　　×

階段を泣きながら降りて来たベッキーが、セーラを追って行く――

ベッキー「お嬢様……！」

×　　×　　×

凝然と立尽して見送るデュファルジュ。

30 同・台所の通路

エミリーを抱いたセーラが、階段を降りて来ると、表へ
――
台所から、ジェームスとモリーが出て来る。
ジェームス「おい、何処へ行くんだ！」
モリー「そろそろ買出しに行く時間だよ！」
セーラ、聞えぬように去る。
その時、追って来たベッキーが、二人の前を駆け抜ける。
ベッキー「お嬢様……！」
唖然と顔を見合せるジェームスとモリー。

31 同・表

使用人階段を上って来るセーラ、足を停める。
―― 広場から、ラビニア達の嬌声。
階段を泣き顔のベッキーが追って来る。

ベッキー「お嬢様……！」

セーラ、思い切ったように、広場へ歩き出す。

ベッキー「行っちゃいけません……お嬢様……！」

ベッキー、追えぬまま泣き出す――

32 同・広場

自転車で遊んでいるラビニア、ジェシー、ガートルードと、女生徒たち

ふと、傍にいたロッティとアーメンガードが振向き、驚く――

アーメンガード「セ、セーラ……」

ロッティ「セーラ・ママ……！」

× × ×

エミリーを抱いて、静かに近づいて来るセーラの姿――

×　　　×　　　×

ラビニア以下の女生徒たち、一斉に振返る――

ラビニア「フフ……矢っ張り、プレゼントをする気になったようね」

×　　　×　　　×

セーラ、離れて立停る――

×　　　×　　　×

ラビニア「有難う、セーラ……遠慮しないで来たらどう?」

×　　　×　　　×

セーラ、エミリーを抱いて凝然と立尽す。――

×　　　×　　　×

ラビニア「どうしたの……私に、そこまで取りに行かせる気?」

ラビニア、セーラに向って歩き出す。続くジェシーとガートルード――

三人、セーラの前に立停る――

ラビニア「フン……ケチケチしないで、さっさと渡しなさいよ!」

いきなりセーラの抱いていたエミリーをわしづかみに奪い取る。

思わず一歩出るセーラ——

×　　×　　×

ロッティとアーメンガードも、ビクッとなる——泣きそうに顔がゆがむロッティ。

×　　×　　×

ラビニア、手にしたエミリーをもてあそび、見る——

ラビニア「フフ……折角だから、貰っといてあげるわ！」

×　　×　　×

突然、ロッティが泣き叫んで走って来る

ロッティ「ダメェ！……エミリーをとっちゃダメェ——！」

ラビニア「なんですって！」

ロッティ「だって……だって、エミリーは、私の妹だもん……ラビニアがとっちゃかわいそうだもん！」

ラビニア「う、うるさいわね！」
その時、アーメンガードが駆けつける。
アーメンガード「やめて、ラビニア！……お人形を……エミリーをセーラに返してよ！」
ラビニア「フン……あんた、いつから私に、そんな口がきけるようになったの？」
アーメンガード「いくらでも云うわ……だって、悪いのはあなたよ、セーラをいじめてるのはあなたよ！」
ロッティ「そうよ、そうよ、セーラ・ママが可哀そうよ！」
忽ち集って来る女生徒たち、口々に非難しはじめる。
「お人形は返した方がいいわ」「そうよ、あんまりよ」
「セーラが気の毒よ」
声、声、声に囲まれて、孤立するラビニアたち三人、流石にひるむが、
ラビニア「う、うるさいわね、みんな……」

一瞬、静まる一同――

ラビニア、摑んだエミリーを見る。

ラビニア「フン……なによ、こんな古ぼけた人形……私だって、最初から欲しかった訳じゃないわよ」

ざわめく女生徒たち。

ラビニア「(セーラに)フン……そんなに惜しいなら返してやるわ、持ってきなさいよ!」

いきなりエミリーを地べたに投げ捨てる

ロッティ「あ、エミリー……!」

急いで駆け寄るとエミリーを拾い上げる。

ラビニア「フン……行きましょ、みんな」

ラビニア、ジェシー、ガートルードを促すと、自転車を引かせて戻って行く。

顔を見合せてざわめきながら、続いて行く女生徒たち

茫然と立尽しているセーラ――

エミリーを抱いたロッティと、アーメンガードが駆け寄る。

アーメンガード「セーラ……」

ロッティ「セーラ・ママ……」

ロッティ、エミリーを渡す――

セーラ「あ、ありがとう、ロッティ……それから、ありがとう、アーメンガード……」

セーラの眼から涙があふれ、堅くエミリーを抱きしめる。

セーラ「許して、エミリー……私だって、あなたを手放したくなんて、なかったのよ……」

茫然と顔を見合せるロッティとアーメンガード――

その時、野菜篭を手に大股に近づいて来るモリーの姿―

――

モリー「セーラ……!」

はっと顔をあげるセーラ――

モリー「こんな所でなにをしてるんだよ！……さ、早く買い出しに行くんだよ！」

野菜篭をセーラに突きつける――

セーラ「は、はい、モリーさん……」

33 同・玄関前

その一部しじゅうを――帰宅姿のデュファルジュが、じっと目撃している。

34 道

エミリーを抱き、野菜篭を抱えたセーラが行く――

背後から、声――

声　「セーラ君……」
セーラ、はっと振返る——
本を抱えたデュファルジュが、微笑で近づく。
セーラ「デュ、デュファルジュ先生……!」
デュファルジュ「どうやら、愛すべきわがフランス人形は、しかるべき持主の許に戻ったようじゃな」
セーラ「えっ……」
デュファルジュ、エミリーに身をかがめ、
デュファルジュ「ふむ、これは素晴らしい……私の眼に間違いがなければ、これは有名なジュモーの作品じゃな」
セーラ「まあ、御存知ですの」
デュファルジュ「はっはっは……私はフランス人じゃ、その位の眼は持っとるつもりじゃよ……所で、買物かな」
セーラ「はい、デュファルジュ先生」
デュファルジュ「よろしい、途中まで一緒に行くとしよう」

一瞬、静まる一同——

ラビニア、摑んだエミリーを見る。

ラビニア「フン……なによ、こんな古ぼけた人形……私だって、最初から欲しかった訳じゃないわよ」

ざわめく女生徒たち。

ラビニア「（セーラに）フン……そんなに惜しいなら返してやるわ、持ってきなさいよ！」

いきなりエミリーを地べたに投げ捨てる

急いで駆け寄るとエミリーを拾い上げる。

ロッティ「あ、エミリー……！」

ラビニア「フン……行きましょ、みんな」

ラビニア、ジェシー、ガートルードを促すと、自転車を引かせて戻って行く。

顔を見合せてざわめきながら、続いて行く女生徒たち

茫然と立尽しているセーラ――

エミリーを抱いたロッティと、アーメンガードが駆け寄る。

アーメンガード「セーラ……」

ロッティ「セーラ・ママ……」

ロッティ、エミリーを渡す――

セーラ「あ、ありがとう、ロッティ……それから、ありがとう、アーメンガード……」

セーラの眼から涙があふれ、堅くエミリーを抱きしめる。

セーラ「許して、エミリー……私だって、あなたを手放したくなんて、なかったのよ……」

茫然と顔を見合せるロッティとアーメンガード――

その時、野菜篭を手に大股に近づいて来るモリーの姿―

――

モリー「セーラ……！」

はっと顔をあげるセーラ――

モリー「こんな所でなにをしてるんだよ！……さ、早く買い出しに行くんだよ！」

野菜篭をセーラに突きつける――

セーラ「は、はい、モリーさん……」

33 同・玄関前

その一部しじゅうを――帰宅姿のデュファルジュが、じっと目撃している。

34 道

エミリーを抱き、野菜篭を抱えたセーラが行く――

背後から、声――

声　「セーラ君……」

　セーラ、はっと振返る――

　本を抱えたデュファルジュが、微笑で近づく。

セーラ「デュ、デュファルジュ先生……！」

デュファルジュ「どうやら、愛すべきわがフランス人形は、しかるべき持主の許に戻ったようじゃな」

セーラ「えっ……」

　デュファルジュ、エミリーに身をかがめ、

デュファルジュ「ふむ、これは素晴らしい……私の眼に間違いがなければ、これは有名なジュモーの作品じゃな」

セーラ「まあ、御存知ですの」

デュファルジュ「はっはっは……私はフランス人じゃ、その位の眼は持っとるつもりじゃよ……所で、買物かな」

セーラ「はい、デュファルジュ先生」

デュファルジュ「よろしい、途中まで一緒に行くとしよう」

セーラ「は、はい……」
　　セーラ、デュファルジュと歩き出す。

35 別な道

　　デュファルジュと来るセーラ――

デュファルジュ「セーラ君……君の身の上は聞いたよ……蔭ながら、心配しておった所じゃ」
セーラ「……」
デュファルジュ「馴れぬ仕事を、よくやっておるようじゃな」
セーラ「は、はい……」
デュファルジュ「（頷く）しかし、セーラ君……どんな事があっても、希望を捨ててはいかんよ……勉強だけは忘れん事じゃ」
セーラ「は、はい……」

デュファルジュ、手にした本を渡す。

デュファルジュ「さ、このフランス語の本をあげよう……毎日、辛いだろうが、我慢して勉強を続けるんじゃよ」

セーラ「有難うございます、デュファルジュ先生！」

デュファルジュ「さてと……では、私は、ここでお別れしよう……元気でな……ボン・シャンス（Bonne chance）・マドモワゼル」

セーラ「メルシ・ボク、ムシュウ、デュファルジュ……」

デュファルジュ、微笑で手を挙げ、一方へ去って行く——

——

ほっと見送るセーラ

セーラのN「デュファルジュ先生は、私を忘れてはいなかったのです……先生のご親切は、私に明るい希望の光を投げかけてくれたのでした……」

（第二十四話終）